

関一とヘインズさん

8月14日に「新村父子 絆の上申書」というレポートを書いた。「広辞苑」編者の新村出が、治安維持法違反容疑で逮捕された次男猛の情状酌量を求めて裁判所に送った上申書が見つかったという話である。これを読んだレポートの愛読者が、大阪市長の関一(せきはじめ)さんと同じようだというメールを送ってくれた。

気になっていたので、久しぶりに写真の本を手にした。分厚い本の最後に次のように書かれていた。「彼の大学生の息子である秀雄が共産主義の支持者として1933年に逮捕されたとき、父である関は息子に国体論への転向を勧める書簡を書き、これはその後、息子が得た国際主義者としての信念を放棄することに重要な役割を果たしたようである。」

この本に中日新聞2007年3月20日夕刊コピーがはさんであった。記事は大阪市の「百年の計」立てた元市長関一の研究書 翻訳出版とある。懐かしさもあり、記事を紹介しておきたい。

翻訳本は、米国・オレゴン大学のジェフリー・ヘインズ助教授の著書「主体としての都市 関一と近代大阪の再構築」(劉草書房刊)。20年越しにコツコツと積み重ねてきた研究成果で、2002年に米国で出版された。ヘインズ氏は、カリフォルニア州立大バークレー校在学中に、たまたま関氏をテーマにした短い論文を目にして都市問題に対する関氏の視点に興味を持ち、研究を始めた。ただ、当時の米国では二、三の論文類しか参考文献がなく、大阪市立大学に留学。関氏の論文はもちろん、市議会の議事録なども丹念に調べた。さらに留学中、ミカン箱に入れられた遺品も見つかった。当時関氏原稿やメモなどは戦時中に消失したとされていたが、中からメモや手紙とともに、関氏がつづった日記も発見。“学者市長”のモノの見方や都市政策研究の原動力になった。

こうしてまとめられた研究書は、留学時の恩師でもある大阪市立大名誉教授で前滋賀大学長の宮本憲一さんとその教え子たちが、2003年ごろから翻訳作業を進め、刊行にこぎ着けた。400ページを超す翻訳本では、工業化の中で環境が悪化した「煙の都」を、市長の立場から「住み心地の良い都市」へと変えようとした足跡をたどる。ヘインズ氏は「バブル崩壊の処理やホームレスの問題を抱える今の大阪市にとっても、市長としてのリーダーシップの重要性など、関氏に学ぶことはあるはずだ」と話している。宮本さんも「都市のアメニティを唱え、住宅政策や大気汚染問題にも取り組み、近代大阪の骨格をつくった。都市問題に興味ある全国の人に参考になる」と指摘する。

関一は1935年10月、任期途中で死去したが、市葬として営まれた葬儀には、8万人の市民が参列したと伝えられている。

(2015年9月5日)

